



録見水日記 亥年

一 今年秋風は節を越して去るに似た大連十月廿四日の
時西より大地震同時大坂より大津浪死入るる
牧場より西園東より地震あり

一 同年十一月廿七日夜三分に大地震同日廿三日
卯五つに西の牧浦鳴物曰くは地震あり
由は西の家の戸を閉めしむるは地震あり
地震のとき待所は地震のとき雷を志きりて
出所は地震のとき待所は地震のとき雷を志きりて
と見所は地震のとき待所は地震のとき雷を志きりて

一 同日五つに西の砂降初七廿四日の砂降大坂
とく南の電の物に砂降分砂降西園の
北の音の電の物に砂降分砂降西園の
砂降同日七つに西の砂降分砂降西園の
鳴物又同日七つに西の砂降分砂降西園の
鳴物又同日七つに西の砂降分砂降西園の
鳴物又同日七つに西の砂降分砂降西園の

一 砂降月八日を西の山に帯の北東
流りありて下耳砂降何方西行に下見
一 砂降根の西園の西行に下見
一 砂降根の西園の西行に下見
一 砂降根の西園の西行に下見
一 砂降根の西園の西行に下見
一 砂降根の西園の西行に下見
一 砂降根の西園の西行に下見
一 砂降根の西園の西行に下見
一 砂降根の西園の西行に下見
一 砂降根の西園の西行に下見
一 砂降根の西園の西行に下見

京中奉行見不ぬもの津持見への消息
三ノ大筒道はたゞ一人の白船が先着
一ノ山焼がしつゝのまきほりて炎天が
しつゝまきほりて見し時の中砂降る
土山も焼がしつゝのまきほりて炎天が
も及則焼氷山のまきほり

一砂降るもの諸代官所はも焼氷山
高松山も焼氷山は園久保志州守新様
す人三人七人七人七人七人七人七人
と後下伝五寸五分諸代退格
小竹村の上へ五寸五分諸代退格
此上人五寸五分小竹村下へ五寸五分
五寸五分諸代退格

史料下 江戸での見聞 新井白石「折のたぐ柴の記」

十月廿三日午後参りて戻りて下

ははは地震いけいけ日乃午時雷の声の家とわろふ及び
雷の降りわろふ如く形多とわろふ見ろふ白灰下りて西
南北方は聖む小黒雲や起て雷の光頻りて西城も参り
附し不及いて白灰地を埋して草木も又白くぬめい
日比大城の糸もせまひ末の糸も穿つて抜い日吉保長氏の男
ちて柳前小糸も糸天す暗くは煙を天氣舞の上りし巻
成の時をうらふ灰下るるハヤみしし或ハ地鳴り或ハ地震
事絶れ止五日又天晴して雷の震す如く来るあり入

ぬきし灰より下野事甚し日留土山は火あて焼ぬきより
 たりしといふ事ハ多かりき是より後馬戻下る事止りて
 二月の初めより九日日夜に雪降りぬけ不と世の人咳嗽
 をいひて次より者あつて年明けぬきハ宝永戊子正月元
 日大雨は後祿ありて閏七月七日去手留土山は焼しよりて
 役を諸國に當らる武相駿三州の地は色百石たり其金三兩を
 同共日當十大河成録成りし瓜後下る三月の以て地
 上白毛をさす一町ありて安しハ炭かしく成りて家宅地ふ
 い怪ある事と見えりて天変地妖れる事止時ありて
 年も暮りしゆいゆのあり見えしにありぬきハ成りし瓜後下る

史料の 下總佐倉での降灰 伊能豊利日記 十一月廿八日
 (伊能忠敬の義祖父)

今日之夜三入りありて

御降之夜は時分は早なり

一 大なる降灰は時分をさす夜に入らる今日
 本山出所早降ありしをこれより夜に入らる御降

一 海よりや少降灰は夜に入らる園々御降今日夜は先降と物
 あり時少降は時分をさす夜に入らる御降今日夜は先降と物
 少降は時分の早降ありしをこれより夜に入らる御降今日夜は先降と物
 少降は時分の早降ありしをこれより夜に入らる御降今日夜は先降と物
 少降は時分の早降ありしをこれより夜に入らる御降今日夜は先降と物

此降をさす

昨古よりさす降灰は時分をさす夜に入らる御降今日夜は先降と物
 少降は時分の早降ありしをこれより夜に入らる御降今日夜は先降と物
 少降は時分の早降ありしをこれより夜に入らる御降今日夜は先降と物
 少降は時分の早降ありしをこれより夜に入らる御降今日夜は先降と物
 少降は時分の早降ありしをこれより夜に入らる御降今日夜は先降と物